
o●CHERRY●o

朧 琥珀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

○●CHERRY●○

【Nコード】

N9740E

【作者名】

朧 琥珀

【あらすじ】

すごい“美少女顔”の男子高校1年生、杉倉波那。そんな彼は、男子校でやっていけるのか？————男子ばっかですが、一応ノーマル小説…のハズ…。

●●第1話●●

高くも低くもない声、華奢な体、栗色のねこっ毛、白い肌、長い睫毛、ぱっちり二重、形の良い唇。

どこからどう見ても、可憐な美少女。

……………“美少女”だあ???

ふざけんな!! 俺は男だバカヤロ———ッッ!!!!!!

俺の名前は……杉倉波那^{スギクラハナ}。誰だ?女みたいとかほざいた奴。
身長165cm、体重45kg、ちっこいけど、健ッッ全な男子
高校生だ。

この容姿のせいで女と間違われて15年……、もう俺は半ば諦め掛けていた。

「は——なっ♪」

突然後ろから聞こえた陽気な声。そして、後ろから抱きすくめられる。

あ。言い忘れてたけど、俺が今日から通うのは男子校。女子なんて1人もいない。

となると、この後ろから抱き付いて来る暑苦しい奴はもちろん男な訳で。

「うああああああっ!!くっつくな気持ち悪い!!!」

毎度の如く悲鳴（という程可愛いもんじゃない）を上げ、首に巻き付いた腕を引っ剥がす。

振り向くと、案の定“あいつ”が立っていた。

「てめえは朝からキモいんだよ!!!」

「うん、波那は朝からかわい——っ♪」

……………殴っていいか？

この気持ち悪い変態野郎は、ハトバ タツキ鳩羽樹。

身長179cm、体重……知らん。

小学校からの腐れ縁。いや、まじで縁切りたいんだけど。

ま、とにかく。認めたくねえけど、結構これが格好良いんだわ。

「波那、駄目だろ？悲鳴は“きゃあああ”じゃなきゃ!」

ご覧の通り、中身はとてつもなく可哀相な奴だけだな。



良かった…。 樹と同じクラスじゃなくて。 心底安心したよ俺は。

ガラッと教室のドアを開けると、皆の視線が俺に集まった。 何だよ？ 俺何かしたか？

不審に思いながら、黒板に書いてある通りに席に着く。

「おはよう」

不意に、前の席に座っていた奴が振り向いた。 動作に合わせて、さらさらの黒髪が揺れる。

「杉倉波那、だよな？」

「うん？ 何で俺の名前知ってんの？」

俺、こんな眼鏡美少年と面識ないよ？

思った疑問を素直にぶつけると、俺の前に座る眼鏡美少年はきょとんとした顔で言った。

「結構有名だよ？」

有名って……誰が？ 何故に？

「“美少女顔”の杉倉波那。それ、お前だろ？」

びしゅじゅ？？？

「特にこの学校は女子いないから、良い目の保養として目を付けられると思うけど」

ああ……。だからさっき教室入った時皆見てたのか。

——って……。美少女って何だ美少女って。俺は男だっつの。しかもその話が本当なら、俺はこれから3年間、発情期の雄犬どもにキモい視線を注がれる訳か。
うわやべ。鳥肌立ってきた……。

「おい？大丈夫か？」

あまりのキモさに現実逃避していた俺を、眼鏡美少年君が現実に戻してくれた。

うーん……。正直言うと、戻って来たくなかったけど。

カンノ シズカ
「菅野 静」

「へっ？」

「俺の名前。菅野 静」

シズカ……。しずか……。静……。

女っぽい名前……。うん。こいつ身長高いけど、なんか仲良くなれそうな気がする。

「“静”って呼んでい？」

軽く笑い掛けると、眼鏡美少年改め“静”は頷いた。
やった！友達第1号☆ ガラにもなく舞い上がる俺。
な・の・にっ、こいつは……。

「じゃ、俺はお前の事“姫”って呼ぶ」

「……………はい？」

だから何故に。俺は男だぞ？ 呼ぶなら“王子”だろうが。いや、それも嫌だけど。 い

「だってお前、顔ホント女みたいだから“姫”が1番合うと思う」

なーに真顔で言ってくれてんだコラ。

前言撤回。こいつとは友達になれそうにありません！

○●第1話●○（後書き）

女顔美少年・波那、変態美少年・樹、眼鏡美少年・静の

高校生活は、これからどうなっていくのか？

そして、波那は発情期の雄犬共から上手く逃れられるのか？？

どうぞお楽しみにww

0 ● 第2話 ● 0

今、入学式の真っ最中。男子校だから、辺りを見渡しても可愛い女子など見付かるはずもなく、隣のクラスの樹と目が合い、すごい笑顔で手を振られるだけ。あー…くそ。返せ俺の青春。

「次は生徒会からの挨拶です」

司会をしている教師がそう言った瞬間、周りから“おおおお”と歓声上がる。

ホラ、女子でいう“きゃああああ”っていう黄色い歓声。

何？何が起きてる訳？ってか、“生徒会からの挨拶”って何だよ。普通生徒会長だけだろ。

自分からさほど遠くないステージへと目を向ける。そこにいたのは俺より遥かに背の高い男子3人組。

1番背の高い金髪の男が、マイク片手に口を開いた。

「あー…。俺が生徒会長のリュウザキ リク琉崎里玖だ。————はい。後は任せた、千聖」

ひょいっと、隣の男にマイクを渡す。随分いい加減だなオイ。よりによってあんな金髪が生徒会長かよ…。どうやって選んだんだ…。

やっぱり顔か？身長なのかつ？くっそー…。

「新入生の皆さん、初めまして」

マイク越しに響いたその声に、俺は顔を上げる。

「入学、おめでとうございます。僕は生徒会副会長、3年B組の藤^{フジ}川^{カワ}千^チ聖^{セント}です」

凜とした声。優雅な物腰。相手は男だって分かっているのに、思わず見惚れてしまった。

3人目は、長めの黒髪をひとつにまとめた、これまた女だと見紛うような男。

……………ん？ どこかで見た事あるような……………。

「初めまして、ご入学おめでとうございます。千聖先輩と同じく、副会長の菅野悠^{カンノハルカ}です」

うん。声はそんなに高くはないからやっぱり男らしい。

……………って、あれ？ 今“菅野”って言ったよな？

俺の前にいる静の肩を、ちょんちょんとつつく。

「何？ 姫」

「姫じゃない！ ……じゃなくて。あれ、お前の兄貴か何か？」

すると、静は首を横に振った。

「悠さんは俺の従兄弟だよ。ひとつ違いの」

ふーん。どこかで見た事ある顔だと思った。

って事は、静も眼鏡取って髪伸ばせば、あんな女と間違われそうな美人になるって事？

すげー…。見てみてえー。つかやっぱ静も女顔なんじゃん♪
再び仲間意識が……………。

俺が、ろくに話も聞かず物思いに耽っていると。

「最後に、少しお知らせがあります」

藤川先輩？が、相変わらず凜とした声で言った。

「1年A組の杉倉波那君、同じく1年A組の菅野静君、1年D組の
キマツヤスカ 木松靖佳君は、

式終了後、生徒会室まで来て下さい」

———はい？

俺、何かしましたか？？

○●第2話●○（後書き）

イキナリ呼び出しを食らった波那と静。

一体何故!?

そして木松靖佳君ってどんな人!!?

第3話をお楽しみに☆

○●第3話●○（前書き）

これから多々、過剰なスキんシップが
出て来るかもしれません。
苦手な方はお気を付け下さい。

●●第3話●●

さてさて。 何故か俺は今、生徒会室にいる訳だが。

「初めまして、かな？」

うわー。 笑顔が眩しいよお兄さん…。

「悠さん、何で俺達呼ばれたんですか？」

そう！ それが聞きたかったのよ俺は！！ 静ナイス☆

俺達、今日入学したばっかなのに何で生徒会室に呼ばれなきゃいけないんだよ。

「ごめんね。 もう1人…、木松君が来てから話すから……」

だから笑顔が眩しいよお兄さん…。

————ガチャッ

ドアが開く音に、皆一斉に振り向く。 そこにいたのは、俺と同じくらいのちっさい奴。

「す、すいません…。 遅れました…。 き、木松靖佳です……」

………樹…。 時折お前が俺を見て感じるらしい“萌え”って気持ち、俺も今分かったよ…。

この木松靖佳って子………超可愛い！！！！

「全員揃いましたね」

書類を手に、立ち上がる藤川先輩。　おい、会長は動かねえのか。

「ここに君達3人を呼んだのは、生徒会役員になってほしいからです」

「「……………はい？」」

俺らの声が綺麗にハモった。

そりゃそうだ。　今日入学して来たばっかなのに生徒会？　何考え
てんだ。

「え…っと、悠さん？　どういう事ですか？」

静が眉間に皺を寄せて尋ねる。　さすがの静も冷静なままでいら
れないらしい。

「どうって……、そのまんまだよ？」

だから笑顔が（以下略）

「見ての通り生徒会は俺達3人しかいないから、1年生から会計や
書記を選ぼうと思った訳」

「はあ…」

「で、でも…、生徒会とかって入りたい人いっぱいそうなのに…
……………」

胸の前で手を組み合わせ、話す靖佳ちゃん（ちゃん！？）。　可愛
いなオイ。

「うーん…。確かに最初はたくさんいたんだけど、誰かさんのせいで皆やめちゃって……………」

そう言って、菅野先輩はとある人物へと目を向ける。 てっきりあのぐうたらな会長だと思ったのに…。

「何の事ですか？悠」

菅野先輩の視線を受け、藤川先輩はにっこりと微笑んだ。 え、あなたが原因…？

「とにかく。杉倉君は会長補佐、静は会計、木松君は書記だからよろしくね」

役職もう決まってるのかよ。 ってか……。

「会長補佐なんてありましたっけ？」

思い付いた疑問をそのままぶつける。 すると、藤川先輩がにっこり笑って答えてくれた。

「それは、あいつのご指名ですよ」

「あいつ？」

指差された方向には、会長が偉そうに座っている。

え…？ ご指名…？？

ちよいちよい、と手招きされ、素直に会長の傍に歩み寄った。

「何ですか？」

「んー…？」

綺麗な金髪…。

「あのさ、波那って呼んでい？」

「へ？あ、どうぞ…」

断る理由もなく、了承する。 ってかそれだけなら手招きする必要
なかったんじゃないか……。
そう思ったのも束の間。

「…波那」

「はい？」

ぎゅっ

……えっ？ 俺何で抱き締められ……。

「お前やっぱ可愛いなあ」

意味分かりません。

駄目だ。 この人……樹と同じ匂いがする……。

○●第3話●○（後書き）

生徒会への勧誘。拒否権はもちろんなし。

他の生徒会役員が辞めた原因は千聖！？

ぐうたらな生徒会長は何故か波那を指名！？

波那以上に可愛い！？木松靖佳！

これからの波那達の運命は！！！？

第4話をお楽しみに☆

0 ● 第4話 ● 0

「あの……会長？」

「んー？」

俺に抱き付いたままの生徒会長は、気の抜けた返事を返して来た。

「そろそろ離してもらえませんかね？」

「やだー」

“やだー” じゃねえよ！！ 男に抱き付かれてるこっちの身にもな
ってみろってんだ！！！！

「里玖」

会長をその名で呼ぶのはこの場に1人だけ。

「何？ 千聖」

「杉倉君、困ってますよ。そろそろ離してあげたらどうです？」

「やだ。だってコイツ可愛いんだもん」

意味分かんねーよ。 絶対コイツ樹と同類だ。 ってか……。

「それなら、あっちの靖佳ちゃんの方が可愛いと思いますが…」

指を差すと、靖佳ちゃんは驚いて目を丸くした。 やっぱかーわい
ーっ。

うん。 って事で手え離せコラ。

「：俺は波那みたいなツンデレが好きなのー」

ブチッ

俺の中で何かが切れた。

「離せて………言ってるだろおおツッ！！！」

変態会長の鳩尾にパンチを喰らわす。

小さく呻き、会長の手が緩んだ。それを良い事に藤川先輩の後ろへと隠れる。

「大丈夫？杉倉君」

菅野先輩が心配そうに尋ねて来た。とりあえず笑顔を返す。

「すみません、あの馬鹿が……」

すまなそうに謝る藤川先輩。

菅野先輩は、他の役員がやめたのは藤川先輩だって言ってたけど、どうも信じられない。

「悠さん、俺達もう帰ってもいいですか？」

おう、静。この流れでそんな事さらっと言えちゃうお前に俺はビツクリだぜ☆

「あ、言い忘れてました。生徒会役員は寮生活をする決まりなので」

これまた静に負けなくらいさらっと言ってのける藤川先輩。オ
プションとして笑顔付き。

えっと……。寮生活ってアレですよ？

この校舎の隣にある学生寮（無駄にデカイ）で、学校以外の時を過
ごす…。

まあ、生徒会役員以外にも寮生がいるっていうのは知ってたけど。
生徒会役員の決まりって事は、この変態生徒会長も寮生活な訳で…
…。

「それって俺らに拒否権———！」

「ありませんよ？」

「…ですよー…」

ははは……。さらば俺の平和な高校生活…。

○●第4話●○（後書き）

ちよつと憧れたりする寮生活。

でも男だらけっていうのはちよつと…。

第5話へ続く。。。

0 ● 第5話 ● 0

「生徒会は学校の様々な事を管理しないといけないので、寮で生活する事を義務付けられているんですよ」

「ちなみに2人部屋だから」

笑顔で説明する藤川先輩と菅野先輩。

やっぱ2人部屋なんだー…。

「あの…、その部屋割りってもう決まってるんですか？」

尋ねると、先輩方は首を横に振った。

良かった…。最低あと1年間は一緒に過ごさなきゃならねえんだ。勝手に決められてたまるか。

ましてやあの変態会長なんかと一緒にになったりしたら………死ぬ。

「さすがにルームメイトまで勝手に決められませんからね」

「それは君達に任せるよ」

俺達に任せる…。 だったら――…。

「靖佳ちゃん！俺と同じ部屋になろっ！？」

「えっ!？」

俺の急な申し出に、靖佳ちゃんは大きな目を更に大きく見開いた。ま、当然だわな。まだまともに口を利いた事さえない奴に、同室になってくれと言われれば。

「えっと……？」

おお、そういえば。俺自己紹介してねえじゃん。

「俺は1年A組の杉倉波那っ」

「あ、と…。ぼ、僕はD組の木松靖佳です…っ」

おろおろと自己紹介する靖佳ちゃん。つか“僕”って……。か
ーわーいーいーっ♪

「でっ。俺と同室、なってくれる？」

「波那っ？同室なら俺が……」

「黙れ変態会長」

誰が好き好んで変態と生活を共にするか。

「何で…僕なの……？」

両手を胸元で組み合わせ上目遣い。いや、実際は俺と身長同じだから上目遣いではないんだけど。

上目遣いをしてるように見えるくらい目が大きい。そして可愛い。
(しっこい)

「何でって……靖佳ちゃんの可愛さに一目惚れしたから？」

「…はい？」

「靖佳ちゃんが息を切らしてここに来た時からもう俺は靖佳ちゃんの虜なのっ♪」

“何なら俺のお嫁さんになる？”とおどけた口調で言うと、靖佳ちゃんは更におろおろし出した。

冗談にも真面目な反応を示して来るなんて……、樹とは大違いだ。
なゝんて、楽しんでいたのに。

「姫。その台詞、なんか琉崎会長っぽいぞ」

ぞわっ

静の言葉に、全身に鳥肌がたった。 ふざけんな！ あんな変態會長と同レベルなんて死んでも嫌だ！！
思いつ切り静に文句を言おうとしたけれど。

「おい。そろそろ教室に戻った方がいいんじゃないの？」

菅野先輩からのもつともな言葉に、我に返る。 時計を見ると、もう30分程経っていた。

「うわ！？もうHRはじまってんじゃね！？」

「姫が無駄口叩くから！」

ぎゃあぎゃあ騒ぎながら生徒会室を出ようとして、ふと思い出す。

「そうだ！靖佳ちゃん！俺と同室になってくれる！？」

「え…、あ、うん…っ」

早口の俺の問いに、靖佳ちゃんは逡巡の後、相変わらず可愛く頷いた。

俺は、靖佳ちゃんが少し逡巡した意味を後^{のち}に知る事になる。

●●第5話●● (後書き)

とりあえず、変態会長と同室に

ならなくて良かったね、波那……。

さて、靖佳が逡巡したのは

理由があった!!!?

第6話をお楽しみに!!!

●●第6話●●

「姫はどうするの？」

だから姫じゃないっつーに。

「どうするって…何が？」

「寮生活。俺は今日から入ろうと思うんだけど」

「え？荷物は？」

「送ってもらう。姫はどうするの？」

「んー…。俺は一応今日は帰ろっかな」

母さん達にも話さなきゃいけないし。

「そういえばさ、静って誰と同室？」

1年3人だから、1人余んじゃん。俺は愛しの靖佳ちゃんだし？

「俺は悠さんと。身内だから気も楽だし」

「ふーん」

俺達の下駄箱でそんな会話をしていると。

「波那ーっ？」

あの忌まわしい声が辺りに響いた。 静に教えてもらった噂は本当のようで、

辺りにいた生徒が一斉に俺の方を向く。

おいおい。“美少女顔の杉倉波那”っていうフレーズ(?) だけなのに

よく俺がその杉倉波那だと分かるな。そんなに俺って女顔?

——なんて暢気^{のんき}に考えてる場合じゃなかった!!

「逃げるぞ静!!」

「はぁ!？」

ぐいっと静の腕を引っ張り、走り出す。

「ちょ……っ、何で俺まで……」

慌てているような、呆れているような。

あんま感情を表に出さない静のこういう所を見るのは結構楽しい。

眼鏡君なんだけど、決して運動が苦手ではないらしく、普通に俺と同じペースで走っている。

助かるな。あいつに捕まりたくないし。

「おい波那っ! 何で逃げるんだよっ!!」

「それはお前が………ってうわぁっ!!!？」

逃げていたはずなのに、いつの間にか追いつかれていた。

振り返った途端、俺の瞳にそいつの顔がかなりのアップで映し出された為、俺は驚いて転びそうになる。

それを支えるように、そいつ——鳩羽樹は俺の腕を引っ張り上げた。

14cmの身長差。こいつに追いつかれたのは、もしかしなくても脚の長させいだ。

「何で逃げるんだよ波那ぁ」

「お前が毎回過剰なスキンシップをして来るからだッ！」

マジほんと勘弁してくれ。俺をどこぞのイケナイ世界へと引っ張り込むつもりか。

「…ね、波那。どちら様？」

静を指差しながら、控えめに聞いて来る。人を指差すんじゃないありませんっ！

「俺は菅野静。そっちは？」

「……鳩羽樹」

あり？ 樹、キャラ違くない？

「おい樹！もっと愛想良くしろよ！俺と静はクラスも生徒会でも一緒なんだから……」

「えっ！？波那生徒会入ったの！？」

「うん。あ、俺明日から寮生活だから朝一緒に登校は無理」

そうだ！もう朝樹に抱き付かれなくてすむじゃん！ good

job 生徒会☆

喜ぶ俺とは裏腹に、どこことなくムスツとしている樹。だからキラ違って。

「なあ、鳩羽」

おう、静。俺の事は“姫”って呼ぶくせに、樹に事は普通に名字なんだなっ。

「お前って……同性愛者？」

——はいっ！？

「ななな何聞いてんだお前っ！！」

動揺のあまりめちゃくちゃ噛みまくった……。なんて事はどうでもいい！！

そんな質問して、もし樹が“YES”と答えたら明日から俺はコイツとどう接していいのか分からなくなるぞ！？

「……………」

無言の樹。

うわああーっ。真剣に悩むなよ頼むから……。そんな真面目な顔、お前に似合わないって！！

「……た、樹……？」

「……波那……」

「な、何……っ！？」

「“どーせーあいしや”って何？」

……………。

「……………樹が馬鹿で助かった……………」

「んー……。つまりホモかって事」

おいィィ！！ 何説明してんだ静ああッ！！！！

お馬鹿な樹も、さすがに質問の意味が分かったようだ。

「違うよー」

ふるふると首を横に振る。

だよなーっ。　いくらお前でもノーマルだよなーっ。

「俺は男が好きなんじゃなくて、“波那”が好きなの」

ぞわわっ

今頭ん中で、会長と樹、どっちがマシか真剣に考えてしまった自分が悲しいぜ……。

○●第6話●○（後書き）

樹君のアブナイ一面発見。
第7話へ続く。。。

●●第7話●●

「寮って……ここ……で、いいんだよね……？」

目の前に立ちはだかるのは無駄に大きい学生寮。

今日から寮生活をしなければならぬ俺は、まだ眠い目を擦りながら荷物を運んでいた。

「――杉倉、君……？」

不意に後ろから聞こえた可愛い声に、俺は振り向く。多分、かなりニヤけているだろう。

「靖佳ちゃん……！」

「おはよう」

うはー。癒されるうー……。何この子。可愛すぎ！

「今日も大好きだマイハニーっ！」

なんて、意味不明な事を言っただけは彼女――…じゃなかった…、彼に抱き付いた。

――途端。

「気安く靖佳に触ってんじゃねえーっ……！」

げしっ

声と同時に脇腹を勢い良く蹴られる。

誰だよ！ 何なんだよ！ 地味に痛いんですけど！！

蹴られた所を押さえながら、蹴りが飛んで来た方向へと目を向ける。

「…いった……。誰だよお前…」

靖佳ちゃんの隣で腕を組む少年。身長は俺や靖佳ちゃんより少し大きい。

「ご…、ごめんね杉倉君っ！この人、僕の双子のお兄ちゃんなの…っ」

はい？ ふたご？？

「1年C組、木松靖都^{キマツヤスト}。よく覚えとけ！」

うっわ何この俺様キャラ。すっげえムカつくんですけど。

ってか靖佳ちゃんの双子の兄って……。髪型以外全然似てないじゃん…。

「お前……………杉倉波那だろ？」

「……………だから何」

「靖佳と同室なんだって？」

「ああ」

「コイツに手エ出したら許さねえからな」

—————うわあ……。変態の次はブラコンかよ…。

○●第7話●○（後書き）

ブラコンBOY登場☆

波那の平和な高校生活は遠退いて行くばかり!?!?
第8話をお楽しみに!!

●●第8話●●

「はっなあ——っ♪」

「ぐえっ」

突然後ろから抱き付かれ、変な声を出してしまう。
ってか、おいおいおい。俺は今日から寮生活で、もう朝抱き付かれる事はないと確信していたのに。

「何で俺はまた抱き付かれてんだよ!？」

「波那が可愛いから♪」

あー殴りたい☆☆

「おはよう、姫」

不意に聞こえた声。だーれが姫じゃボケ。

「ねえ波那…」

樹が相変わらず抱き付きながら不満そうな声を漏らした。　　ってか
お前体重掛けんな。　　重い。

「なんでコイツ…菅野に姫って呼ばれてんの？」

「……言いたくない」

何故に自分のコンプレックスに自ら触れなきゃならんだ。俺は樹の腕を振り解き、教室へと歩を進める。

樹が泣きそうな顔をしてたなんて、気付く訳なかった。



「あの…」

不意に声を掛けられ、立ち止まる。そこには数人の男子生徒。（男子校だから当たり前）

「杉倉君、生徒会入ったって…本当？」

「へ？何で知ってんの？」

昨日決まったばっかなのに。俺が肯定を表す反応を示すと、生徒はいきなりざわつき始めた。

「やっぱりそうなんだ！」

「さすが…」

「あと2人いんだろ？」

「1人は杉倉波那と同じクラスだって…」

「生徒会に1年から3人も出るなんて異例じゃね？」

「生徒会って…あの…？」

え？ え？ え？ 何で皆さんそんなざわついてんの？

「掲示板、見てないの？」

問い掛けに、俺は頷く。自慢じゃないけど掲示板とか見た事ないね。

「生徒会就任のお知らせ、貼ってあるよ」

まじか。 仕事早いなオイ。

好奇心に釣られ、掲示板がある所へと引き返す。 少し離れた所に、
静や靖佳ちゃん達の姿を見付けた。
そして、目的の“お知らせ”へと目を向ける。



＊生徒会就任のお知らせ＊

この度、新しい生徒会役員が決定致しました。

○生徒会会計－1年A組 菅野 静

○生徒会書記－1年D組 木松 靖佳

○生徒会長補佐－1年A組 杉倉 波那

※生徒会について

生徒会長・琉崎里玖をはじめとする生徒会執行部は、本校において最高権力者とする。

主に危険事項以外ならば、学校行事等は生徒会執行部の自由を許可する。

生徒会役員への不満等がある場合は、【リコール】を許可する。

＊以上＊



えー…つと。 ツツコミどころはいっぱいあるんですけども。
とりあえず。

“ 最高権力者 ” って———どういう事? ?

●●第8話●●
（後書き）

第9話へ続く。。。

●●第9話●●

「ほら、あいっだろ？杉倉波那って…」

「うわ、俺まじ女かと思った…！」

「で、その前の席に座ってんのが会計の…！」

「ああ、菅野静？」

「あれ？副会長と名字同じじゃね？」

「言われてみれば、似てるよな」

「そういえば書記の奴見た？」

「あ！俺見た！すっげー可愛い顔してんの！」

「まじ？俺見て来ようっ」

あー…。うるさい。教室の奴らはもちろん、他のクラスの奴らまで廊下からこっちを覗き見ている。

何なんだよ。そんなに生徒会に入っただのが物珍しいか。

俺だってビックリしてるわ。急に生徒会役員になったかと思っただら、生徒会は最高権力者だって？

あの変態生徒会長にそんな権力握らして大丈夫か？ 破滅すんぞこの学校。

「…姫」

「あ？」

くそ…。 “姫”と呼ばれて普通に返事しちゃった自分が悲しいぜ…。

「鳩羽の事なんだけど…。」

「樹？」

「ああ」

何故このタイミングで樹？ あー、そういえば朝置き去りにしたっけな…。

「あいつ、寮に入るかもよ？」

「うええっ！！？」

ガタンと音を立てて立ち上がった俺を、皆不思議そうに見つめる。
うわ…、はず…。

「ど、どうして…？」

座り直しながら、恐る恐る尋ねる。

「いや…。姫、朝鳩羽の事置いてったじゃん？」

「うん」

「その時、あいつすごい泣きそうな顔しててさ」

泣きそう！？ あいつが！？ ってか男が簡単にそんな顔すんなよ…。

「しばらくして、“俺も寮入ろうかな” ってぼそつと言ってた」

まじかー。本格的に俺の事ストーカーしてるみたいになって来たな…。

昔はあんなじゃなかつたのに…。…あれ？ あいつって、いつからああなったんだっけ…？



「杉倉君っ」

ドア付近から聞こえた可愛い声に、俺は振り向く。そこには、靖佳ちゃんが立っていた。

「ちよっといい？」

うわー。マイハニー可愛いーっ。ちよっどころかいくらでも時間ならありますよー♪

とてとてと靖佳ちゃんの元に歩み寄ると、俺らを見て周囲から“ちっせえ”だの“女みてえ”だの
気に食わない声が聞こえて来たが、今日は靖佳ちゃんに免じて許す
！！

「どうしたの？」

「んっど…、今朝はごめんね？靖都が……」

「ああ、大丈夫大丈夫！木松って、すっごい弟思いなんだなっ」

そう笑い掛けると、靖佳ちゃんもふにやっと笑った。うーわー、かーわーいーいーっ。

「あ、あのね、副会長が今日の放課後生徒会室に来て欲しいって…。菅野君にも伝えてもらえるかな…」

「げ。今日も？」

生徒会の仕事が多いのは分かるし、別に仕事は嫌じゃない。嫌な

のは、あの変態会長との接触。

「んー。分かった。静にも伝えとく」

すると、靖佳ちゃんは安心したように帰って行った。

はあ……。最初は早く放課後にならないかなーとか思ってたけど、今は放課後なんか一生来て欲しくない。

ある意味俺の中の変態会長って偉大かも……。あ、俺が“変態会

長”って言いまくってるせいで

皆さんあいつの本名忘れてねえ？ “琉崎里玖”だよ。ま、どう

でもいいけど。

●●第9話●●（後書き）

変態会長、名前は琉崎里玖。

どうか覚えてやって下さい…。

第10話へ続く。。。

●第10話●

「失礼しまーす？」

何で疑問系なんだ、と静にツッコまれながら、生徒会室へと足を踏み入れる。

ついにこの時間が来てしまった。変態会長からの変態行為を避る為身構えるが、そこにあいつの姿はなく、いるのは副会長2人。

「こんにちは」

藤川先輩と菅野先輩に笑顔を向けられ、俺はたじろぐ。

いや、誰でもたじろぐって！ 2人共超綺麗なんだよ！？

「琉崎会長はいないんですか？」

「ああ、里玖先輩？」

「里玖なら今会議ですよ」

「ええっ!？」

静の質問に対する藤川先輩の返答を聞いて、俺は目を丸くした。
会議!？ あいつが!!!？

「杉倉君…、すごいビックリしてる」

菅野先輩がくく…っ、と笑いを零す。

「そりゃあビックリしますよ！あいつが生徒会長って言われた時も

ビックリしたけど……」

「やっぱり？ 里玖は生徒会長とは正反対の風貌してますからねえ」
「じゃあ俺達の事はどう思った？」

納得する藤川先輩と、興味津々で聞いて来る菅野先輩。

菅野先輩みたいな人が“俺”って言うのと、違和感あるなあ……。

「……お2人は……、すごい綺麗な人だと思いました」

俺の言葉にきょとんとする副会長。Z。そんな事には気付かず、俺は続ける。

「見た目もちろんだけど……、動作とか、話し方とか。本当に女の子みたいで……」

あまりにも綺麗で、思わず見惚れた。さすがにそこまでは言えないけど。

ちらりと目を向けると、2人は微笑む。顔を真っ赤に染めて。

「そこまで言われると照れるなあ……」

「杉倉君も可愛いですよ」

優しく、頭を撫でられる。その気持ち良さに、可愛いと言われた事はスルー。

呆けている静と靖佳ちゃんを視界の端に捉え、にへら……と締めまらない笑みを零していた時だった。

「……った……」

急に、俺の頭を撫でていた藤川先輩が顔を顰める。

見ると、俺の後ろから伸びた腕が藤川先輩の白く細い腕を強く掴んでいた。

「何…するんですか…？——里玖…」

俺が振り向くより早く、藤川先輩がその名を呼んだ。

「…お前こそ何やってんだよ」

かーなりご立腹の様子。 えー。 何で怒ってんのこの人。

「何って…頭を撫でただけですが？」

あれ？ なんか笑顔が黒いですよ先輩。

「勝手な事してんじゃねーよ」

いやいやいや。 アナタの許可いるんですか。 ってかいきなり熱い抱擁かまして来た奴がよく言うよ。

うーわー。 2人の周りが黒く淀んで…。 …うん。 藤川先輩の本性が見えて来た気がするよ…。

生徒会役員が次々と辞めていった理由もこの人だったっけなあ…。

この“黒さ”が原因っぽいね…。

「3人共っ」

見かねた菅野先輩が、俺ら1年を呼ぶ。

「先輩達、あぁなったら手付けられないから…、せっかく来てもらって悪いんだけど、今日はもう…。」

苦笑いを浮かべる先輩。確かにあの2人…、譲りそうにない…。
お言葉に甘えて、俺らは生徒会室を後にした。

○●第10話●○（後書き）

負けず嫌いの里玖と腹黒い千聖。

この2人は悠がいないと

喧嘩が終わりません。

1番の苦労人は、

もしかしくなくても悠ですね；；

第11話へ続く。。。。

○●第11話●○

「俺…、藤川先輩ってもっと女々しい人かと思ってたよ…」

背は高いけど、白いし細いし…、かなりの女顔だし。まさかあんな腹黒い一面を持っていたとは。

「俺は何となく分かってたけど」

静の言葉に、俺は目を丸くする。

「何でっ!?!何お前…、エスパー!?!?」

「んな訳あるか」

ズビシッと、軽いチョップを喰らう。おい静…。 “姫” って呼ぶくらいならもう少し敬ってくれ。

「悠さんからちよこつと聞いてたんだよ。3年の副会長は一見優しくうんだけど、中身は恐いって」

「へえ……」

知ってたんなら早く教えてくれれば良かったのに。

「じゃあやっぱ他の生徒会役員さん達が辞めていったのって……」

「藤川副会長の裏の顔を知ったから」

ああ…、やっぱり…? だよな。あんな美形だらけの生徒会、自ら辞める人なんて

めったにいないよなあ…。　　ってかそれほど恐いのか藤川先輩。

「俺も辞めたいなー…」

ぽつりと呟くと。

「え…？杉倉君…、辞めちゃうの…？」

ぎゃーッッ！！　やめてっ！　そんな目で見ないで靖佳ちゃん！
！　僕辞めないからっ！！

ふるふると首を横に振ると、靖佳ちゃんはふにゃっと笑った。　それはもうホント可憐に。

「うはーっ。超可愛いマイハニー！」

ぎゅっと抱きつく。　うわ細くてちっさいなハニー。　ちっさい事
に関しては俺も人の事言えないけどな。

「く、苦しいよ…。えっと…、ダ、ダーリン…？」

おどおどしながら俺の悪ふざけにノってくれる靖佳ちゃんにキュン死…。

ふと。

「あ、波那…」

上から降って来た声。　顔を上げると、ガキっぽい笑顔が目に入っ
た。

「樹？何してんだ？こんな所で」

「何って……波那の事待ってたんだよ」

満面の笑み。こいつ花に例えたら、絶対向日葵だ。

それにしても、生徒会終わるまで待ってるなんて……律儀な奴だな……。

「別に待ってなくてもいいのに。お前寮生活じゃないし、大変だろ？俺なら静と靖佳ちゃんと帰るから……」

俺がそう言ったのは、ただの良心からだったのに。

この一言が樹を傷付ける事になるなんて、知らなかったんだ。

○●第11話●○（後書き）

第12話へ続く。。。

0 ● 第12話 ● 0 (前書き)

鳩羽樹編スタート。
樹視点。

0 ● 第12話 ● 0

昔の俺は、今ほど背も高くなく、ホントに目立たない奴だった。

特別仲の良い友達がいる訳でもなく、

周りとの接触は最低限の事だけ。きつと、根暗な奴だと思われてただろうな…。

相変わらず1人でいる事が多かった小学4年生。そんな時だった。転校生がやって来たのは。



「初めまして。今日からこの学校に通う事になりました、杉倉波那です。よろしくお願いします」

丸くて大きな瞳に、肩口まで伸びた栗色の猫っ毛。

無表情で話すそいつは、見た目も名前も本当に女の子みたいで、思わず釘付けになった。

「じゃあ席はあそこ」

先生の指示に何の反応を示さず、無言で席に着く。俺の左後ろ。

その無愛想な態度に、こっちの方がハラハラと心配になった。

そんな態度じゃクラスに馴染めないよ、って。俺も人の事は言えないんだけど。

「杉倉…君？」

思わず振り向いて声を掛ける。茶色くて、丸い瞳がこっちに向けられた。

「何？」

「え…、いや、えっと…」

何って聞かれても困るんだけど…。とりあえず名乗っとくのが筋？

「俺、樹。鳩羽樹っていうの。よろしく」

「ふーん」

“ふーん”って…！ 顔可愛いのに性格悪い！？

「もう少し、さ…、笑うとかした方がいいんじゃない…？」

少し棘のある口調でそう言うと、彼の顔が一気に強張った。手が、微かに震えている。

「杉倉君…？」

何か悪い事言ったかな…、と心配になった。

覗き込んだ顔は真っ青。それでも彼は何でもないと言を横に振った。手は…、こんなに震えているのに。

●●第12話●●0（後書き）

過去前編終了。

後編（第13話）へ続く。。。。

0 ● 第13話 ● 0 (前書き)

引き続き…
樹視点。

0 ● 第13話 ● 0

「杉倉くーんっ！これ付けてみて！」

そう言って女子の集団が差し出してきたのは、リボンの付いた赤いカチューシャ。杉倉君の顔が引きつる。

「あのさ…、俺男なんだけど」

彼の主張も虚しく、その柔らかそうな髪に、赤いカチューシャが添えられた。

その光景を見て、クラス中が息を呑む。だって、あまりにも可愛かったから。

男子だっていうのは分かってるんだけど、その微妙な髪の長さとか…、ホントややこしい。

「すっごーい！杉倉君ホントかわいー！女の子みたい！！！」

女子がきゃあきゃあ言う中、1人溜息を吐く杉倉君。なんだか、思ったより親しみ持てるかもしれない。

不意に、1人の女子が鏡を取り出して来た。

「ホント可愛いから杉倉君も見してみなよ！」

そう言って鏡を開き、彼の方へ向けた瞬間——……

ガシャン！

パリーン…

払い除けられ、床に落ちた鏡が砕け散った。 皆、蒼然となる。
当の本人…杉倉君は、
あの時みたいに顔を真っ青にして、立ち尽くしていた。 するりと、
赤いカチューシャが落ちる。

「…ごめ…っ」

謝罪の言葉もままならないまま、彼は教室を飛び出した。

「杉倉君!？」

皆が呆然とする中、俺も後に続いて教室を出る。 鏡を払い除けた
時、右手を切ってたみたいだし、
保健室に連れてかないと……。 それに…、今彼を放っておいたら
いけない気がする。

「杉倉君…っ」

後を追って行くと、ひとつの空き教室に着いた。 その中に、震える
小さな人影がひとつ。
そつと手を伸ばすと、ビクッと震えたのが分かった。 何に怯えて
いるのかは分からないけど……。

「——…?」

優しく頭を撫でてあげると、不思議そうに顔を上げた。 やんわり
と微笑んでやる。

「――杉倉君は、自分が嫌いなのか？」

“笑って”って言った時も、鏡を差し出した時も、何かに…、自分に怯えているみたいだった。

「…わか…んな、い……」

“ただ…”と、弱々しい声で続ける。

「ある人が…、俺の顔、嫌いって……。笑うと…、気持ち悪いって……っ」

――ああ…、そっか。だからあんなに表情を殺してたのか。

「俺は、杉倉君の顔嫌いじゃないよ」

「え？」

「俺だけじゃない。クラスの皆、杉倉君の事、可愛いって言ってたじゃん」

男に対して可愛いはどうかと思うけど、いまはそんなの関係ないっ。彼はきよんとした後。

「…そ…っか…。ありがと…」

照れ臭そうに笑った。



「…杉倉君？これは何のつもり？」

俺が指差すのは、ぴよこんと結い上げられた自分の前髪。

「だってお前、前髪長いんだもん！そんな長くしてたら暗い奴だっ
て思われるぞ！！」

いや、実際思われてるんで…。

「俺こんなキャラじゃないし…」

「あ！ちょ、何で取るんだよ！」

ゴムを取ろうと伸ばした手を、ぐいっと押さえられる。

「もったいないじゃん！そんな良い顔してんのに！！」

「は？」

「俺女顔だから、お前みたいな顔懂れるっ」

瞳をキラキラ輝かせて見上げてくる杉倉君に、俺は前髪を上げるの
も悪くないかな、とか思ったり。

俺がいつも傍にいて、お前を護るっていう約束…、忘れちゃったの
か？

波那……。

○●第13話●○（後書き）

第14話へ続く。。。

0 ● 第14話 ● 0 (前書き)

波那視点に戻ります。

●●第14話●●

「おはよ、波那」

不意に後ろから聞こえた声。聞いた事があるというか、毎日のように聞いていた。

……なのに。今日はどこか違う。不思議に思いながら振り向くと――……

「……………誰!？」

「誰って……、酷いな……。樹だよ」

いやいや、分かってますとも。何年一緒にいたと思ってんだ。俺が言いたいのはそういう事じゃなくて……

「何で今日は前髪下ろしてんだ？」

いつも赤いボンボンの付いたゴムで結い上げていたのに。今日は茶色い髪がパサリと下ろされている。

「…別に――…。何となく？」

にへらっと笑うその顔は、いつもとさほど変わりなかったけど。前髪下ろしたただけでかなり雰囲気って変わるもんなんだな…。元々顔は良かったけど、いつもあの馬鹿っぽい髪型のせいで打ち消されてた気がする。だから今日はホント誰だか分からなかった。だ

「お前、下ろしてた方がいいんじゃない？」

ぐっと背伸びして樹の頭をガシガシと撫でる。すると樹は目を見開いて、切なそうに顔を歪めた。

…？ 俺、何か悪い事した？ 頭撫でられたの、嫌だったのか？

「……波那、本当に忘れちゃったんだ…？」

そう言ったこいつの声が、泣きそうだと感じたのは俺だけだろうか。ふと、樹は俺の手のひらの上に何か置いた。赤い——ボンボン…？

「波那が持ってた。それ元々波那のだし」

「樹…？」

「俺にはもう、必要ないから」

樹はそう言って、歩き出した。口調も表情も、明らかに怒っている。

でもどうして？

どうしてお前の目はそんなに泣きそうなんだ——…？

○●第14話●○（後書き）

樹も一応美形なんですよ。

一応ね。

そんなこんなで第15話に続く…

○●第15話●○

樹の奴、一体急にどうしたんだろ…。

「明日の午後、就任式がありますので――…って聞いてます？ 杉倉君」

「へっ!？」

すいません、全然聞いてませんでした。くっそー…。樹の事が気になって集中できねえ。

「もう一度言いますよ？」

はい、是非お願いします。　　ってか藤川先輩、恐いから怒らないで…。

「明日の午後、体育館で生徒会の就任式があるんですが、気を付けて下さい」

気を付ける？

「どうしてですか？」

「生徒会に反感を抱いてる奴らがいるからだよ」

変態会長――琉崎が、椅子をギシつとしならせながら言った。　　よ
う。　　久しぶりだな、バ会長。

「反感？ あれか。会長があまりにもいい加減だから…」

「ちっげーよ」

何だ違うのか。

「杉倉君、生徒会執行部が最高権力者って事は知ってる？」

いつにも増して、真剣な表情の菅野先輩。

「あ、はい。掲示板のトコで初めて知りましたけど」

そういえば気になってたんだよな……。生徒会といえど、所詮は生徒。権力なんて握らせていいのか？

「この学校は、生徒からの意見を大いに取り入れる為、生徒会に大方の決定権を託しているんだ」

「ま、その最高者がこの里玖っていうのがどうしても納得出来ない人達なんかが反乱を起こす訳です」

なんだ。結局会長が原因じゃん。ってか反乱って……いつの時代だよ。

「俺に関してだけじゃねえだろうが」

「まあね」

「学校に楯突こうとする奴らが、俺らの邪魔をして来んだよ……」

苛立たしげに琉崎は舌打ちした。

「それで、明日の就任式にも邪魔が入る可能性がある」と

静も琉崎と同じように面倒臭そうな顔をする。

「可能性っていうか…、もう大方確定事項なんだよね」

この口調からすると、前回の就任式なんかでも邪魔をされたんだろう。

「でも…、気を付けるって言ってもどうすれば…っ」

靖佳ちゃんの小さな問い掛けに、藤川先輩はふうつと息を吐く。
結構悩ましい事態らしい。

「とりあえず、無闇な行動は避ける事。あと1人での行動も注意した方がいいですね」

1人になるな、と。 結構事は重大そうだ。

「波那は俺と行動を共にすれば問題な——…」

「黙ってるこの変態」

……………え？

言っとくけど、今の台詞俺じゃないよ！？ につこり笑顔の藤川先輩だから。

「とにかく！皆今日は早く寮に帰って、明日に備える事！」

菅野先輩の言葉を合図に、俺達は生徒会室を後にした。

0 ● 第15話 ● 0 (後書き)

第16話へ続く。

○●第16話●○

あれから何事もなく時間は過ぎ、この時はやって来た。
けれど。

「姫、木松靖佳の姿が見えないんだけど…」
「あれ…、ホントだ」

集合時間はとうに過ぎているのに。

「俺ちよつと行って来るわ」

「なら俺も…」

「静は先輩達に言っというて！」

「でも1人での行動は…っ」

あー、もう。 静は真面目だなあ。

「大丈夫だよっ！にーちゃん連れてくからっ」



「靖佳がいない？」

木松靖都は、つり目気味の瞳を見開いた。

「あいつ生徒会のところ行って来るってさっき言ってたぞ」

うーん…。これはもしかしくなくても反乱組の仕業だよなあ…。
よりによって靖佳ちゃんに……。

「俺今から探しに行くんだけど、お前も手伝ってくんねえ？」
「…言われなくても」

とまあ、ある意味最強の助っ人を連れて、俺は体育館を後にした。



髪を乱しながら、校舎の階段を駆け上がる。探し人は、意外と早く見付かった。

目の前には、2・3人の男子生徒に腕を無理やり引っ張られている靖佳ちゃんの姿。

「…お前ら何してんだよ」

木松の低い怒声が響き渡る。かなりご立腹だな、こりゃ。

「何かな？ボクたち。今から俺らこの子とちよっとお話があるんだけど」

1人の男子生徒がにやっとした笑みを零しながら言う。
ちよ…、その顔でその台詞を吐くのはやめてくれ。何か如何わしい。そして気持ち悪い。

「デメエら…、その汚ない手を放せよ…」

俺の隣で今にも殴り掛かりそうな木松を宥める。 問題起こされちゃ困るでしょ。 一応生徒会役員だし？
でもやっぱり、俺もその汚い手で清く可愛い靖佳ちゃんに触られるのは耐えられない。
って事で。

「その子の代わりに、俺とお話しませんか？ お兄さん方」

侮蔑 i n スマイル、0 円です♪

○●第16話●○（後書き）

第17話に続く。

○●第17話●○

とある空き教室。目の前にはあんまり見覚えのない男子生徒3人。
多分3年生…かな？

「生徒会長補佐の、杉倉波那君…だっけ？」
「覚えて頂き光栄です♪」

にっと笑ってみせる。

「本当はねえ、あの木松靖佳って子が1番言う事聞いてくれそうだから、

あの子にお願いしようと思ってたんだけど…」

「生徒会を内側から潰したいんだよね、俺ら」

「で、君にスパイ？みたいな事をお願いしたいんだ」

台詞を3人で分割するなっ！ 1人でしゃべれよこの野郎。

「どうして生徒会を潰したいんですか？」

「どうしてって…、そんなの何となくだよ」

何と…なく…？

「何となく気に食わないから潰したい。それだけだよ」

笑顔で言い切るそいつらに、嫌悪感が溢れて来た。ただ気に食わないから潰したい？ お前らは何様だ。

確かに変態やら腹黒万年笑顔さんもいる。それでも…、それでも、

俺にとっては大事な居場所なんだよ。

「ねえ、先輩」

俺から居場所を奪うな。

「もしかして…、嫉妬してんの？」

居場所がない辛さは十分過ぎる程知ってる。

「自分にはない権力とか…、人望とか」

だからもう、俺から居場所を奪わないでくれ。

「会長達に嫉妬してんでしょ？」

「——ガッ！」

1番近くにいた短髪の奴に殴られ、俺の体は床に叩き付けられる。
一瞬意識がとびそうになるが、何とか持ち堪えた。口の端に血が
滲む感覚がする。

大丈夫だ…。これくらい、あの頃に比べたらどうって事ない。

「チビが！調子に乗ってんじゃねえぞ！！」

無防備になった腹部に蹴りを入れられる。吐き気が一気に込み上げた。

「……っう…」

「——あれえ？」

男の声に、ゆっくりと顔を上げる。その手には、赤いボンボンの付いた見慣れたゴム。

殴られた拍子に、ポケットから落ちたのか…。

「杉倉君、男のくせにこんなの持ってるんだあ？」

「…かえ…せ…っ」

よろよると立ち上がる。それは樹のだ。汚い手で触るな。

「何？そんなに大事な物なの？」

必死に奪い返そうとする俺を、馬鹿にしたように笑う。

「返せ…っ、…返してくれ…っ」

それは、俺が樹にあげたんだ。“初めての友達の証”として…。

「そんなに返して欲しいなら返してあげるよ」

その言葉に安堵した時だった。

「ほらっ」

あろう事か、窓から外に向かってそのゴムを投げたのだ。

「な…っ！」

慌てて窓から身を乗り出し、手を伸ばす。ゴムを掴む事に夢中で、ここが3階だって事なんか忘れていた。

届け、届け、届け…っ。

「…あ…っ」

やっこの思いでゴムを掴んだ時、ぐらりと反転した俺の視界。 落ちる、と認識するまで時間は掛からなかった。

『杉倉君の事は、俺が護るから。どんなに辛い事があっても、このゴムに誓って俺が護る』

不意に脳裏を過ぎる樹の言葉。 ふざけながら交わした、幼い日の約束。 このゴムは、約束の証。

ああ、そうか。 お前が時折泣きそうだったのは、俺があ約束を忘れてしまっていたから。

お前はちゃんと、約束を守ろうとしてくれてたんだな…。

ごめん…、樹——…。

○●第17話●○（後書き）

波那は忘れていた些細な約束事。

それでも、樹の中では生き続けていたんだ…。

第18話へ続く。。

○●第18話●○

空が、だんだん遠ざかって行く。体が、ふわりと空気に包まれて。

「——はな——」

地面へと近付いて行く事への恐怖からか、自然と薄れ行く意識。そんな中で、聞き慣れた声が俺の名前を呼んだ気がした。



——ピッ、ピッ、ピッ、ピッ……

微かに響く機械音に、そっと目を開ける。目の前に広がるのは、

白い——…壁？

ああ、違う。天井だ。所々に蛍光灯が見える。

「姫っ!？」

「杉倉君!？」

白い天井を映していた俺の視界を遮るように覗き込んで来るいくつかの顔。

「僕らの事、分かりますか？」

「……………静と、靖佳ちゃん。藤川先輩、菅野先輩、それに…会長」

それぞれの名を答えると、皆はほっと息を吐いた。俺は状況を理解出来ないまま、起き上がろうとする。が、体のあちこちがズキズキと痛んで力が入らない。

「ああ、動いちゃ駄目だよっ」

「全身打撲、左手骨折」

うわ。　どうりで痛い訳だ。

「あの連中は即刻退学だ。…まったく馬鹿が！だから1人で行動するなって言っただろ！」

琉崎に怒鳴られ、ビクリと体を震わせる。まさか、こんなに怒られるとは思っていなかった。

「あいつがいなけりやお前、今頃死んでたぞ」

琉崎が横を指差した。その先には隣のベッド。しかし、カーテンが引かれている為、中までは見えない。

「姫を庇って一緒に落ちるなんて……」

庇う？　俺を？　一体誰が——……。　

『——は　な　——』

「っ！」

意識を失う間際に聞いた声。　あの声は、紛れもなくあいつの…樹の声だった。

「ちょ…っ、杉倉君!？」

突然起き上がった俺に、皆驚愕の声を上げる。 ああ…、痛い、痛い、痛い、痛い。

全身がありえないくらい痛いけど、その重い足を引き摺って、隣のベッドを囲うカーテンに手を掛けた。

○●第18話●○（後書き）

第19話へ続く。。。

○●第19話●○

カーテンの内に広がる光景を見て、俺は言葉を失った。

「……た、つき……？」

確かにそこにいるのは樹のはずなんだ。その証拠に、彼は俺を見てにこりと微笑んだ。

ただ…、頭部、右目、首、右腕、右足…、至る所に痛々しい包帯を巻いて。

「な…んで……」

何で俺の為に。俺はあの日の約束なんて忘れていたのに、どうして俺よりも酷い怪我を負ってまで助けるんだ？

「波那…、怪我、ない…？」

首を怪我しているからなのか、掠れた、とても小さい声で樹は言った。俺は首を縦に振る。

ホントは全身打撲で、左腕骨折してるけど、こんなの樹の怪我に比べたらどうって事ない。

「そ…っか。良かった…」

痛い…。何でそんな顔で笑うんだよ。

「ねえ…、波那……？」

「ん…？」

樹の辛うじて自由な左手には、あの赤いボンボンの付いたゴム。

「俺…、波那から貰ったこのゴム…：…付ける資格、ある…：…？」

そう尋ねるこいつの顔は、今にも泣きそうで。　つられてこっちも涙目になった。

約束、ずっと忘れないでいてくれたのに。　命を張ってまで俺を助けてくれたのに。

何でこいつはこんなにも心配そうなんだろう…。

樹の手からゴムを取り、彼の茶色い髪へ手を伸ばす。　包帯のせいで少し手間取ったけど、

このゴムで初めて結んであげた時のように、長い癖のある前髪を結い上げてやった。

『このゴムに誓って、杉倉君は俺が護るよ』

『じゃあ、お言葉に甘えて…、よろしく。約束だよ？』

1番赤いボンボンが似合うのは、お前だよ——…：…樹。

○●第19話●○（後書き）

はい！。

たっちゃん編、これにて終了ですw

どうでしょうか？ 良い話っぽく書けましたでしょうか？

C H E R R Yはまだまだ続きます★

●第20話●

パン、パン！ 生徒会室中にクラッカーの音が鳴り響く。
普段様々な書類が乗っている机には、ジュースやお菓子がたくさん
並べられている。

「杉倉君、鳩羽君、退院おめでとう！」

藤川先輩が笑顔を向けて来た。　って言っても、俺は今から2週間
前には退院してたんだけど。
何せ樹の奴が重症でさ、こいつの退院を待ってたらもう6月。　あ
っという間に梅雨の時期。

「あのー…、俺まで良かったんですか？生徒会役員じゃないんです
けど……」

樹が珍しく控えめに尋ねる。

「良かったも何も、お前のおかげで波那は助かったんだし」

「そうですよ。生徒会のゴタゴタに巻き込んでしまったんですから」

うーん。　すっかり3年生ペース。　やっぱ歳の差ってモノをいう
なあ。

「でもホント、姫が無事で良かったよ」

柔らかな声でそう言って、静は笑った。

「……え…？　ちょ…っ、静が笑……っ？」

「静っ、もう1回!」

「やだ」

即答かよ。　ちえー、ケチー。　ほんの一瞬だったけど、すっげえ綺麗だったよ?

藤川先輩と血縁だっていうの分かるわ。　いつも今みたいに笑っていればいいのに。

さっきから気持ち悪い目でこっちを凝視している変態会長と樹には気付かないフリ。

だっていろいろ面倒そうだし?　まあ、樹には世話になったけど。……と、不意に。

「?」

服の裾をくいと引っ張られ、振り向く。　そこには。

「杉倉君…、ちょっといい…?」

何かな?　マイハニー。

○●第20話●○（後書き）

第21話に続く。

0 ● 第21話 ● 0

ぎゃあぎゃあ騒いでいる連中を放って、生徒会室を出る。
と。

「杉倉っ！大丈夫か！？」

いやいやいや、あんた誰よ？　ってな感じの男が数人。

「杉倉君、3年生にボコられたって聞いて……」

あー…、そういえばクラスにこんな奴らいたかも。　ほとんど話した事ないのに俺の心配してくれたんだあ。

つか、ボコられたつつつても、実際2回しか攻撃喰らってないんだけどね。

「ってかごめん。今から靖佳ちゃんと話あるから」

俺の後ろで縮こまっている靖佳ちゃんを指差す。

「ヤスカ？」

「ああ、あれだろ？生徒会書記の。そういえば、こいつ庇って杉倉怪我したらしいじゃん」

靖佳ちゃんの肩が、ビクリと震えた。

「えっ、マジ？じゃあホントはコイツがボコられるはずだったんだ？」

「杉倉を身代わりにしたんだ？——最低だな…」

———ガンッ

辺りに響き渡ったのは、俺が壁を蹴った音。

「…最低なのはどっちだよ」

何勝手な事言ってた。人の気も知らないで。

「べらべら勝手な事言いやがって…。護られる側だって辛い…。お前らに分かるか!？」

キッと睨み付けると、クラスメート達は少したじろぎながら去って行った。

「……ごめ…っ、杉倉く……」

小さな嗚咽。振り向くと、靖佳ちゃんがしゃつくりを上げながらぼろぼろと涙を零していた。

「僕の、せいで……っ、杉倉君に…怪我…っう…」

ああ、言いたかったのはこれか。

「……んーん。俺も……ごめん…」

ぽつりと謝る。真っ赤になったその瞳は、“何で謝るの”と言いたげだ。

「護られてるだけっていうのも辛い事、分かったのに……」

脳裏に、樹の顔が浮かぶ。 ……分かっていた、はずなのに……。

「おいお前っ！何靖佳の事泣かしてる！？」

うっわ。 ムードぶち壊しだよおにーさん。

「靖佳っ！大丈夫か！？」

「な…、靖都…っ？」

さすがの靖佳ちゃんもビックリしたようで、涙が止まっている。
やれやれ…、気が抜けた。 この話はここまでとしようか…。 く
るりと背を向けると。

「おい」

何だ。 まだ何かあんのか？ 言っとくがもう脇腹へのキックはご
めんだぞ。

「……靖佳の事、助けてくれてさんきゅ……」

小さい声でそう言ったかと思うと、木松は靖佳ちゃんの手を引いて、
どこかへ歩いてってしまった。

……結局生徒会室へは戻らない訳ね。

「————クスっ……」

たまには、人助けも良いかもしれない。

窓を伝う雨の雫を眺めながら、そんな事をぼんやり考えていた。

0 ● 第21話 ● 0 (後書き)

第22話へ続く。

0 ● 第22話 ● 0 (前書き)

菅野静編スタート。

0 ● 第22話 ● 0

俺と樹の退院から約2ヵ月。あれから特に変わった事もなく、俺達は（どちらかというと）平和な生活を送っていた。そんなこんなで只今夏休み真っ最中。
……なのにな。

「何で俺らは学校で仕事なんだよ!？」

「誰かさんが1ヵ月弱入院した上、無責任な会長が相変わらず仕事をサボるからです」

うっ。藤川先輩にそう言われたら何も言えなくなるじゃないかあつ！

で？俺ともう1人の原因はのんびりジュースなんか飲んでるし。

「コラてめえ。会長なんだからちゃんと仕事しろよ」

げしつと椅子を蹴る。こっちにはバックに藤川先輩がいるから恐くないもんねーっ！

「……じゃあさ、ひとつ条件」

なーにが条件だ。会長なんだから働くのは当たり前だろ。…でもま、働いてくれれば俺にも夏休みが……。

「何？条件って」

「波那が俺の隣で仕事——……」

「却下」

久々に出たな変態発言。 え？ 別に変態じゃないって？ 近くにいたら分かるさ。

「あ、ねえねえ皆」

良く響くこの声は菅野先輩だ。 ここだけの話、静と声質はそっくりなんだけど、静より感情が豊か。

「明日、この裏の通りで夏祭りがあるんだけど、皆で行かない？ 先輩方も……」

「いいですね、行きましょうか」

「よーし。これで仕事から解放される」

よくも抜け抜けと。 てめえは仕事してねえだろーが。
…それにしても夏祭りかあ…。

「靖佳ちゃんと静は行く？」

「え…あ…、杉倉君達が行くなら…僕も……っ」

「俺も姫が行くなら」

よしっ！ 決まりだな。 夏祭りとか、テンション上がるーっ♪
あ、後で一応樹も誘っておいてやろう。

0 ● 第22話 ● 0 (後書き)

新章スタート！

第23話へ続く。

0 ● 第23話 ● 0

「うっわぁ——…」

ずらりと並ぶたくさんの屋台に、瞳を輝かせる。 焼きそばにたこ焼き、りんご飴に綿菓子と…。
どれから食べようかなあ。 ……やべ。 涎出て来た。

「姫、涎」

「わ、分かってるよ！」

静に指摘され、歯を剥く。

「なあ、俺一緒に来て良かったのか？皆生徒会の人じゃん…」

樹がガラにもなく心配そうに呟いた。 その頭を、背伸びして撫でてやる。

「いーのっ。そんな事気にするなんてお前らしくないぞっ」

俺がそう言っていると、樹は瞳をうるうるさせて。

「波那ぁ——っ」

勢い良く抱き付いて来た。

うーん…。 確かにこういう方がお前らしいけど…、やっぱ嫌だな。

「分かったから離れろ」

ベリツと樹の体を引き剥がす。
ちくしょー。長い腕しやがって…。

「あ、杉倉君達、もう来てたんだ？」

背後から聞こえた声に振り向く。そこにいたのは。

「…わ、和服美人…。」

浴衣を着た菅野先輩と藤川先輩だった。（ついでにラフな格好のバ会長）

「すごーいすごーいっ！先輩きれーっ」

ありえないよ！この2人ホントに男！？

「ありがとうございます、杉倉君」

「なんかテレるなあ」

そう言って笑う姿もまた綺麗で、すごいなーと思う。

「波那、何か食いたいのあるか？買ってやるぞー」

……このバ会長。馴れ馴れしく肩を組むなっ。

「あ、そういえば…、木松君は来れないみたいです」
「なんかお兄ちゃんが許してくれないとか」

菅野先輩がふふ…と笑う。

くそつ、木松め……。靖佳ちゃんの浴衣姿が見れないじゃんかっ。

(もはや会長並み)

絶対可愛いのにー……………って…。

似合いそうなのは靖佳ちゃんだけじゃないじゃんっ♪

「なあ静つ！ お前浴衣――」

振り向くが、そこにいたのは樹だけ。

「あれ……？　なあ、静は？」

「え？ さあ…」

樹も首を傾げる。
お前まだ静と仲悪いのか？

「何？ 静いないの？」

「あ…、はい…。さっきまでいたんですけど……」

静が何も言わずにいなくなるなんて…。

「んー。大丈夫じゃない？ 静の事だから、何かあったら電話なり何なりするだろうし」

「まあ…、そう…、ですよね」

俺や樹ならまだしもあの静だし。

きっと、大丈夫だろ。

0 ● 第23話 ● 0 (後書き)

第24話へ続く。。。

0 ● 第24話 ● 0 (前書き)

静視点。

○●第24話●○

肩丈の、真っ黒い髪が見えた。

あの人が好きだった、赤い色の浴衣が見えた。

人込みに消えて行く、後姿。

もうあの人はいないって分かってる。

それでも。

「百合さん…っ！」

…呼ばずには、いられなかったんだ——…。



ガシャンッ！

「違う、そうじゃない！何度言ったら分かるんだ!!」

割れた花瓶。 散らばった花びら。 叩かれた頬が痛い。

「分家の悠はあんなに出来が良いのに、どうしてお前は……っ」

知らないよ、そんな事。

本家に生まれたって、才能のない俺と、分家の子供でも才能溢れる

悠さん。 本家とか分家とか、
今さら気にする方が馬鹿げてる。 ただ、この時間だけは、才能の
差を嫌と言う程思い知らされた。
俺にとって稽古の時間は、苦痛でしかなかったんだ…。

『静様、おはようございます』

『静様、稽古はもう終えられたのですか？』

『静様、遠くに行ってはいけませんよ』

“静様”、“静様”、“静様”…。

どうして、俺より年上の人が様付けで呼ぶの？ 本家の子供だから？
嫌だよ…。 こんな関係…：嫌だ…：。

「静っ？ どうしたの、暗い顔して」

「また叔父様に怒られちゃった？」

不意に、上から声が降って来た。 顔を上げると、綺麗な顔がふた
つ。

「悠さん…、百合さん…」

2人は、にっこりと笑った。

1つ年上の悠さんと、2つ年上の百合さん。 2人共分家の子供な
んだけど、

他の人とは違って、俺の事を“静”って呼んでくれる。

俺の、大好きな人。

0 ● 第25話 ● 0 (前書き)

静視点。

0 ● 第25話 ● 0

「活けた華を否定された？」

「そっかー…。叔父様はやっぱり厳しいねえ」

「…うん…。でも、俺が上手く出来ないのが悪いんだし…。」

小声で呟いて俯くと、ポンポンと頭を撫でられた。

「そんな事言わないで。私は好きよ？ 静の活けた華」

「うん、俺も。シンプルなんだけど、なんか優しい感じがするんだよね。まるで、静本人みたい」

百合さんの言葉に頷く悠さん。

「だから、元気出して？」

「何があろうと俺達はずっと、静の味方だから」

——ああ…。あったかい。

どうしてこの2人の言葉はこんなにも俺を楽にしてくれる？ その何気ない一言が

俺に元気と勇気を与えているだなんて、2人は知っているのだろうか。

本家とか分家とか関係ない。これが、“家族” ってもものなのかな…。

「ねえ、静が中学を卒業したら、3人でひとつの華を造りましょうよ！ それで、本家の玄関に飾って頂くの」

「ああ、それいいね。百合の華やかさと、静の優しさ…」

「それと悠の斬新さ。3つが合わさったら、きっと素敵な作品になるわ。来年が楽しみ♪」

「約束だね」

3人でそっと交わした約束。他愛もないこんな口約束、すぐに忘れてしまうだろう。それでも俺にとっては嬉しくて、楽しみで。この約束を糧に、必死に稽古した。どんなに辛くても苦しくても。

だけど、その約束が果たされる事はなかった。

その年の冬、肺炎で百合さんが死んだ。

0 ● 第25話 ● 0 (後書き)

過去編終了。

0 ● 第26話 ● 0 (前書き)

静視点。

●●第26話●●

「待って、百合さん！」

違う。百合さんじゃない。

「百合さんっ！！」

百合さんはいない。死んだんだ。
そんな事分かってる。けれど…。

「百合さん……百合さん……ゆ……り、さん………」

…帰って…来てよ——…。

『静』

「…え…？」

『静』

「…百合、さん…？」

『泣かないで、静。心配になるでしょ』

「百合さん…っ、どこにいるの…?」

『あなたは優しい。だけど、もっと強くならなきゃ』

「強く…?」

『そう、強く。いつまでも私の後を追っていては駄目。新しい友達だって、出来たんでしょう?』

「…姫達の事…?」

『強くなって、静。強く——…』

「百合さんっ!?!」

「静っ!!」

背後から大声で呼び掛けられ、振り向く。

「姫……」

「まったく…、急にいなくなりやがって」

文句を言いながら、姫は俺の腕を掴んだ。

「心配したんだかなっ!」

“心配になるでしょ”

「……………っ」

「えっ！ちょ、静っ！？何で泣くんだよ！！」

「波那、何泣かしてんの」

「うっさい樹！」

すぐ脇で姫と鳩羽の声がして、少し離れた所で副会長達が笑ってる。

“友達” …か……。

「悠さん」

「どうしたの？静」

「俺、百合さんに会ったよ」

「…え…」

「強くなれて、言われた。心配になるからって」

「……そう…。お盆だから、帰って来てたのかもね…」

「ん…」

ポンポンと頭を撫でられ、目を細める。

百合さん。

俺、強くなるよ。

百合さんや悠さん、姫達にも心配かけないように。

だから

さようなら。

0 ● 第26話 ● 0 (後書き)

静編終了。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9740e/>

o●CHERRY●o

2010年10月16日02時43分発行